

上級生さん水をください！
大本意敬
一九四五年八月六日午前八時十五分、世界
で最初、原子爆弾が広島市の上空五百八十メ
ートルのところで爆発したとき、私は広島二
中の三年生十五歳のときでしたが、学徒動員
で三菱被服製作所のがス工場の二階で作業の
開始を前に窓際の椅子で待機しておりました。
その時です、突然カメラのフラッシュの何
千、何万倍もするような強烈な閃光と放射能
を全身に熱線に襲われました。
私は何かの事故で工場のがスタックが爆発
したと思い、後ろを振り返りました。
そのとき、窓越しに私の目に入つたのは、
真つ青な真空中に直径百メートル、表面温度九
千度、照射した熱線温度は五十度という、燃
えるようなオレンジ色の巨大な火の球でした。
私がアツと墜き目を見張つた瞬間、実は私
の記憶はそこまでしかありません。その時、
私は爆発の轟音に襲われて気絶したのでした。

その私がわれに返つたのは、秒速四百メー
ートルの強烈な爆風に襲われて、工場内の紛塵
を顔に叩きつけられたときでした。
そのとき気がついたのですが、私は轟音に襲
われたとき、瞬間的に階段の手摺と椅子とで
できた三角地帯に伏せて、倒壊した柱や板壁
がその手摺に及えうれて直撃をまぬがれて助
かっていたのでした。
ヤニがう散け出し、階下おりて驚きました
各工場も大変な惨状です、食堂などは完全
につぶれていました。
市内に目をやると、中心部は全面的に燃
えあがり、黒煙を吹き上げ、赤い雲がめらり
りと燃え上がっているのが見えます。
学校と寮がどうなっているか心配です。私
は数人の寮生といつしよに寮をめぐりて二キ
ロの道を急ぎました。さいわい寮はまだ焼け
残っていたのですが、食堂は完全につぶれて、
学生の部屋は一部は屋根落ちていたのですが、
何人とか大丈夫でした。

1
2

3
4

寮は場も高く、火の勢いも少し衰えたのが、
 路地を隔れて、倉庫一帯のところで助かりま
 した。
 気がつくと、空は猛煙で暗く、時々大粒の
 雨が襲ってきてきました。後で分ったことですが、
 それが悪雨ばかりです。
 えこへ、爆心地近くの本川付近へ家屋疎開
 の勤労奉仕で行っていた教人の一年生が、見
 るも無惨な重傷の身で、怒えさがる街の中を通
 って帰って来ました。

私はその重き息を吐いた瞬間、息がつまり、声も
 出ませんでした。顔は焦りただれ、大きく腫
 れあがって眉毛や睫毛も焦げて黒くになり、目
 のかたは火傷で白く、目は見えないうような状
 態です。制服は熱線を通りかかるとぼろぼろ、まご
 に一年生たちはこりせり着とは思えぬい翠で
 帰り着いたのです。
 その一年生が私に手の前で敬礼をして「一
 年おのり只今帰りました」と、声にはらばい声
 で報告を述べたのです。当時の教育の輝きも

見せつけられました。
 しかし、一年生たちの力もそこまですし
 た。もはや力尽きて寮の縁側に倒れこんで
 呻めさながら、まごに「いのちりの底から紋
 リ出すよう低い声で「上級生さん、水をくだ
 さい。上級生さん、水をください。」と訴え
 つづけておりましたが、「重傷者に水をやる
 と死ぬぞ」と止められ、私たちは耳をふさぐ
 思いで「ついに水を飲ませなかつたのです。
 例え一年生たちの身を案じてのこととはい

え、今そのことが悔やまれてなりません。死
 ぬと命がとおれが存分に飲ませられたのにと
 思ふと漸腸り思っています。
 その時、私たちの襲わった一年生たちは寮
 生の教人に過ぎませんが、三百二十一人の一
 年生と四人の先生が四、五日以内に全員亡く
 なっていたのでした。
 しかし、あの時の「上級生さん、水を下さ
 いの悲痛な声は今も私の胸から消えることは
 ありません。あゝから六十九年、今の日本の

9

状況は、あの尊い犠牲者たちに「卑らかに眠
 って下さい、遺ちは繰返しませぬから」の言
 葉も、非武装、非戦の平和憲法第九条も無き
 が如く無視されつつあります。
 今こそ歴史の教訓を忘れてはならぬので
 す。尊い犠牲となった死者たちの歴史に耳が、
 その声なき声を聞いてゆかなければならぬ
 のです。死者の歴史こそ真の歴史であります。
 最後に今は亡き原爆詩人、栗原貞子さんの詩
 を頂いておわりたいと思います。

10

「一度目はあやまちでも、二度目は裏切り
 だ、死者たちへの誓いを忘れまい」。

遠い過去で、日付で語れる一日が昭和20年8月6日です。

「悪魔の足跡―原爆その後」の手記を書き、人生を狂わした原爆を呪っていた父が死んだ74歳を私は越えてしまいました。

平成24年母も、父の手記を冊子にした弟も、健康管理手当てを貰いながら亡くなりしました。

69年前、私は牛田国民小学校1年生、その日は、空襲警報で集団登校が遅れ、運命の時間少し前、正門まで百米位手前の家の前で、上級生の敵機来襲の声で、石垣とそばに横たえてあった電柱の間に避難しました。

基本動作どおり、防空ずきんを被り、腹ばいになり、手の指四本で目を押さえ、親指で耳をふさぐと、すぐに「ピカッ」と光り、そして「ドン」という音を聞きました。目を覆い、耳をふさぎながら分かったのは原爆の力だったのでしょう。

手ははずして見ると、目の前が真っ白。それから、もやが晴れた状態の風景は一変して、道路には瓦や破片が散乱していて、学校は倒れているし、倒れた家や、傾いた家、戸のガラスは無くなっていて、壊れた風景でした。

学校へ行き始めましたが、学校から逃げ帰る生徒が見え、夢中で500米離れた我が家まで走りしましたが、息苦しかった記憶はありません。

ガラス等が散乱した家で、母と弟の無事を知ると付近のわら屋根の家が火事だったのを見に行きました。

近所で日なたにいた人が火傷をしておられるので、原爆の熱の威力はすごいのだと思います。

家で生活できないので防空壕の生活になりましたが、父が夕方めがねを無くし、竹を杖代わりに帰ってくるまで、何度公道まで迎えに行っただか覚えていませんが、ここで見た避難する人々の悲惨さは目に焼き付いて離れません。

原爆資料館の蟬人形や、原爆の映画が目を閉じずに見られるのは、それ以上を見ていたためでしょう。

火傷に油を塗ればよい、水は飲ませるなど近所の人々が介護しておられました。原爆の恐ろしさは、熱と破壊力そして放射能にあります。

70年間草木も生えないという風評もありましたが、避難指示は出ませんでした。現在の広島は健康優良県で、女性平均寿命は、86.33歳政令都市で最長寿の記録を打ち立てています。

それには、年2回の原爆検診が果たしている成果があると思います。

原発事故では1ミリシーベルト神話がまかり通り、多数が避難したままです。被爆者として、放射能の本当のことを発信すべきではないでしょうか。

広島・長崎への原爆使用は国際法違反です。地球上で再び使用させてはいけないし、持っていれば、想定外のことも起き、惨事も起きます。

人間の知恵を出しましょう。

岡本栄得

原爆体験記

岡本光晴

昭和20年(1945年)8月6日、月曜日、午前8時16分、広島市内に世界最初の「原子爆弾」が米軍によって投下された。

一発の原子爆弾(注・1)の炸裂で、何万という市民が一瞬にして殺され市内は焼き尽くされてしまった。

辛うじて生き残った人も浴びた放射能(注・2)が体を蝕み、白血病や癌や心臓病に冒されて長年の闘病生活の挙句、死に至った。

私の父は、金輪島で軍務に就いていたが救助活動を命じられ、市内で救助活動中に2次放射能を浴びたのが原因で胃癌に冒された。

母は、市内へ出向いている途中で直接被爆したのが原因で白血病に冒された。

二人とも戦後26年経った昭和46年(1971年)に相次いで死んだ。享年64歳、59歳だった。

一方、私は戦後31年経った昭和51年(1976年)、40歳のとき心電図異常が見つかり、慢性虚血性心臓病(注・3)と診断され、以来ずっと投薬治療を受けている。

当時、私は小学校4年生(満9歳)だった。

その日は爆心地から牛田山を越えて、直線距離にして約5kmにある戸坂小学校(当時は国民学校と称していた)の校庭で被爆した。

注・1) 核兵器爆弾

注・2) 核兵器爆弾が炸裂したときラジウムやウランなどの元素が崩壊して出す

注・3) 狭心症、心筋梗塞発症の前触れとなる病

8月6日といえれば学校は夏休みの最中なのだが、4年生以上は「軍馬（注・4）」の飼料とする干草を作るための「草刈り登校日」だった。全員が鎌と籠を持って登校し、生徒全員は校庭に整列し朝礼を受けている真っ最中だった。

8月6日の朝はそれはそれは見事に晴れ渡った朝だった。校庭に整列していて受ける日差しは強かったが、カラッとした天気は汗ばむこともなく、吹き抜ける風の心地良ささえ感じていた。

朝礼台に立った校長の訓話は今でもはっきりと覚えている。米軍の艦載機（注・5）の爆音を聞き分けることの内容だった。

曰く、「グラマン（注・6）」は低音で腹に響く爆音が特徴で、ロッキードP38（注・7）は甲高い爆音が特徴である……」などと。

訓話は最後まで聞くことはできなかったが、おそらく敵機の爆音を耳にしたとき、音を聞き分けて身の対処の仕方を教えることだったのだろう。

訓話の最中、何気なく空を見上げたとき、青く澄み渡った遙か遠い上空の一点にキラキラと胴体を光らせ、音もなくゆっくと飛んでいる敵機が（注・8）目に入った。

注・4)馬は戦場で大砲などの重兵器を運ぶという重要な役目があった

注・5)航空母艦が積載している戦闘機

注・6)日本海軍の「零式戦闘機」に匹敵する性能を持つ艦載機で、地形によっては

超低空飛行で機銃掃射攻撃をしてくる(呉にあった旧・海軍工廠が襲撃を受けたときは、操縦カンを握っている飛行兵の顔が見えたと聞いた)

注・7)双発双胴の艦載機で飛行速度が抜群に速い

注・8)「エノラゲイ」という愛称が付いた「ボーイング B29爆撃機」

上空に敵機が飛んでいるのに何故、警戒警報のサイレン（注・9）

も空襲警報のサイレン（注・10）も鳴らないのかと、不思議に思いながら再び空を見上げたら、今度は落下傘のような白い小さな物体がフワフワ・フワフワと落ちてくるのが目に入った。

何だろうかと思いつながら目を伏せたその時だ。

目がくらむほどの閃光が体中に降り注いできた（なんと言えばよいか。それこそ億万燭光の光が体中を包んだと表現しようか・・・）。一瞬、大型のフラッシュライトを浴びたときのように周囲は掻き消され何も見えなくなった。同時に体中にぼーっと暖かみが走った。

午前8時16分、大手町一丁目にある「産業奨励館（注・11）」の上空で原子爆弾が炸裂したのだ。

「退避！」の号令がかかり、裏山の防空壕に向けて走り出そうとしたその瞬間、今度は足元を拘うほどの激しい風が、目も開けられぬほどの激しい風が襲いかかってきた。

爆風なのだ。

砂塵が舞い上がるなかを、背を丸めて一歩、二歩と足を運んだあとには全員が一斉に裏山の防空壕へと走り逃げた。

原子爆弾が炸裂したときの温度は摂氏約600度だったといわれ

注・9) 長音繰り返し

注・10) 短音繰り返し

注・11) 現在の原爆ドーム

ており、上空の空気が瞬時に膨張し爆風と化したのだらう。

600度という温度は、鉄を焼けば赤く色づき始めるほどの高熱だ。紙屋町にある「三井・住友銀行」の入り口の石段には座っていた人の影が、皆実町にある「広島ガス」のガスタンクの胴体にはタンクに登る螺旋階段の影が、焼き付けられた残影として残り（注・12）何年もの間消えなかった。

薄暗い防空壕のなかでは、何もわからなまま先生も生徒も身を寄せ合って時の過ぎるのを待った。10時過ぎ頃までいただらうか。ようやくやく解散となり家路についた。が、どのような道順で帰ったのか、途中の様子はどうだったかなどは全く記憶にない。異常事態のなかへ一人放たれた恐怖心で一杯であったのだらう。小走りで帰ったことだけ覚えている。

家に帰り着いて度肝を抜いた。

なんということだ。障子も襖も吹っ飛んでおり、表口から裏口までがすっかり見通せ、柱の目が目に入ってくるのだ……。母が内職でよく使っていた「シンガーミシン」までもが真横に倒れている……。

爆風が吹き抜けたのだ。

我が家は牛田山を越えた麓に位置していたが、山を越えて襲ってきた爆風が重いミシンまで倒すのだから、爆風を直に受けた市内ではその被害は計り知れず、吹き飛ばされるなどで亡くなった方も大勢いたことは容易に想像できる。

注・12) 600℃の熱で影の周囲が変色し影が焼き付いたように見えた

吹き抜けの我が家では、母が板の間で妹を抱いて呆然と座っていたが私の顔を見てようやく気を取り直した。

母は市内に向かう途中で被爆し、身体に受けた強い放射能は後々になって白血病と化し、苦しませ死に至らしめた。

一方、父は爆心地から直線距離にして約6kmの、宇品沖にある金輪島にあった陸軍運輸部で被爆した。身体への被害がなかったこともあって、軍の命令で午後からは市内で被災者の救護活動にあたり、午後10時頃だったか無事に帰ってきた。

ところがこの救護活動が「2次放射能」を浴びることになり後々に至るまで苦しんだ。2・3年後になって頭髮が抜け始めた。左頭頂部に直径2センチくらいの円形脱毛から始まり、1年くらいで丸坊主となった(注・13)。挙句の果ては胃癌にやられ苦しみ死んだ。

さて、「原子爆弾」が炸裂して3、4時間経った昼前後頃からは、被災した方々がつぎからつぎへと隊列を組むようにして戸坂へ辿り着き始めた。棒切れを突いて一人で来る人。人の肩を借りて足を引かずって来る人……。

皆、着ている衣服は黒焦げてボロボロになっていた。背肌は露出し、髪は振り乱れ、顔も手も足も煤で真っ黒になっていた。

両眼だけはかっと思開かれており、身に受けた被害の無念さを問う怒りで満ちていた。どのような目に遭われたのだろうか。

詳しいことは何もわからないまでも「火の海」をくぐり抜けて来られたのだろうか。その異様さに子供心にもただなら

注・13) 身体に受けた放射能で頭髮が抜ける現象は医学で証明されている

ぬ恐ろしさを感じた。

一方、その頃になって牛田山の向こうからは、湧き上がるような黒煙がもくもくと勢いをつけて天高く上がり始めた。被災者の姿から市内では火の手があらちらで上がり、火が火を呼んで建物がつぎつぎと焼き尽くされている煙だろうと想像はできたが・・・。

市内で実際に目にしたならば、まさに地獄絵を見る思いだったに違いない。

煙に巻かれて舞い上がった半分黒焦げの紙切れが、方々にひらひらと舞い落ちてきた。

午後3時頃だっただろうか。天がにわかには暗くなりはじめたと思ったら、大粒の雨がひどい夕立のように音を立てて降り始めた。

凡そ一時間くらい降り続いただろうか。これが後にいう放射能を含んだ「黒い雨」だった。この雨を浴びて「原爆症」になった方も数多くいる。

雨で涼しさが出てきた縁側に座って、立ち上る黒煙を、舞い落ちてくる黒焦げの紙切れを、まるで夢を見ているかのように呆然といつまでも見上げていたのを思い出す。

翌日から小学校は被災者を収容する病院となった。収容しきれない被災者は民家で引き受けた。

我が家では二人の兵隊さんを引き受けた。重傷の方はひどい火傷を負っておられ、顔も手も水ぶくれで膨れ上がっていた。

火傷で体内の水分が水ぶくれと化したのであろう。喉の渇きから何度も何度も水を要求されるのだが、ガラス製の「水差し」が口に

通らないほど顔が腫れているのだ。

かろうじて水を飲まれたあとは安堵の様子が見えたが、今度は体力が見る見るうちに衰えて来、2・3日後には死んでゆかれた。

なんと酷いことか。

戸坂では何名の方々が亡くなられたのであろうか。

学校に隣接する裏山の裾の田圃の一角が（現在の桜東町2番辺り）茶毘場となり、毎日のように夕暮れになると火葬の煙が上がった。

多くの遺体は火傷による水泡が残っていることもあって火葬が難しく、遺体を井桁状に積み上げその上からガソリンをぶっかけて茶毘に付していたと、後で聞いた。

8月9日には長崎市内に再び「原子爆弾」が投下され、またまた大勢の市民が犠牲となった。

一方で、遠い外地の戦場では戦いむなしく犠牲となった数多くの兵士。「玉砕」という美名の戦いで犠牲となった多くの兵士。あるいは飢餓に苛まされて犠牲となった兵士などなど。幾万もの兵士が犠牲となった。

本土では日を迫って米軍による空爆が激しくなり、工場地帯を狙った1トンの爆弾で、市街地を焼き払う焼夷弾で、グラマンの機銃掃射で、膨大な数の一般市民が犠牲となった。

これらの尊い犠牲者の数は軍民合わせて310万人といわれている（私の親類縁者のなかでも7名が犠牲になった）。

昭和20年8月15日、3年と8ヶ月続いた戦争はようやく終わった。

星の12時のラジオで、天皇陛下から「戦争終結」の玉音放送(天皇陛下のラジオ放送)が流れた。雑音が混じる放送は聴き取り難かったが、独特の抑揚のある玉音放送を聴いた母から「戦争が終わったのよ」と、教わった。

夏休みは繰り上げられ、8月20日過ぎ頃から始まった。

学校が使えないうち5年生以上は「三宅神社」の拝殿で、4年生以下は「くるめ木神社」の拝殿で、いずれも午前・午後のクラス交代で授業を受けた。

小刀で削ろうとすればすぐ芯が折れる鉛筆と、字を書こうとすればすぐ破れる薄っぺらな西洋紙を手にしての授業だった。

教師から最初に指示されたことは、教科書をはじめ学用品にいたるまで「軍あるいは軍閥」など、戦争に関係したと思われれる単語とか記述を「墨塗り」することだった。

鉛筆に彫ってある「三菱」の文字まで削りされた。

ところで、くるめ木神社へは、現在の「ザ・ビッグ戸坂店」と「戸坂小学校」の間の道を抜け、前述した茶毘場の傍を通って行った。

二十畳敷きぐらゐの大きさの茶毘場は、累累たる白骨で埋め尽くされていた。はじめて目にしたときは身体に「震え」が走ったが、この状態が何日も続くうちに慣れてしまった。

秋が近くなって雨が降る日には、白骨からでる「隣」が青白い炎で時折、ぼろぼろ・ぼろぼろと、浮き上がって燃えるのが見られた。これも初めての経験だったが不思議と気味が悪いとは感じなかつた。

った。

茶毘場には時折、遺族の方が来られて採骨されていたが、縁者のお骨とは区別が叶わぬまま丁寧に採骨されていた。

戦後69年が経ち、今や日本は「安倍総理」をはじめとして、あらゆる分野で戦争を全く知らない世代に変わりつつある。

彼らには「戦争の酷さ」、「原爆（核兵器）の悲惨さ」を正確な記録で残し知らしめることで、あるいは機会あるごとと語り継ぎ知らしめることで、われわれの経験した悲劇が二度と繰り返すことのなきよう、戦争のない平和で豊かな国、日本を築き上げてもらいたいものだと思う。

(完)

(補遺)

私の「原爆体験記」は9歳という年少期であったことと、戸坂という狭い地域での被爆体験であることで、世に知られているような「迫力」に欠けることは止むを得まい。書き残したことを2、3付け加える。

戸坂小学校は陸軍病院として指定されたため、被災した多くの兵士・一般市民はこぞって戸坂小学校を目指して逃れてきた。校舎、校庭は被災者でいっぱい足踏み場もなかったという（8月7日午前2時頃までに1万3千人が逃れてきたと記録にある）。

その状況のなかで治療に当たられた「肥田軍医」のご活躍は、多くの資料に書き留められている。

戸坂小学校では600人もの方々が亡くなった。

一方で、戸坂村は「拳村一致の大奉仕」、「村を挙げての野戦病院」の体制が敷かれた。

各家庭では被災された兵隊さんを引き受け、あくる日からは婦人会による「炊き出し」が始まった。

真っ白な「銀シャリご飯（白米ご飯の別名）」が茶碗に山盛りにして配られるのだが、兵隊さんたちは火傷がひどく口を開けることすらできなかった。

ご飯は各家庭の補食となった。

当時は食料難で食べるものが少なく、「銀シャリ」を口にするということなどは夢のまた夢だった。不謹慎だがこの「銀シャリ」が実に美味かった。到底忘れられない思い出となっている。

兵隊さんの多くは山梨県出身の方が多かったこともあづて、世話になったお礼にと、翌年から小学校卒業生全員に毎年、「卒業記念」と彫られた印鑑を贈って下さった。

鉛筆大の白い楕円形の印鑑だった。

当時の戸坂はほとんどの家が「農業」を生業としており、大概の家が農耕用の牛や馬を飼っていた。被災して1週間くらい経った頃だったろうか、これら農家の人が牛や馬に荷車を引かせ市内から物品を山積みにして帰ってくるのだ。いわゆる火事場泥棒なのだが、「濡れ手に粟」・「一攫千金」を実現したかのように、牛や馬の手綱を手にして表葉帽子をかむった顔には満足感が漂っていた。

子供心にもなんと悲しい行為をするものだと、苦々しい思いで一杯だった。

以上

被爆体験

平成26年5月20日

被爆地：広島市談原中町 当時：4歳

現住所：三原市 [redacted]
氏名 [redacted]

原爆が落とされたときは 2.5キロの殺原ので 被爆しました。その後 母の弟に当たるとおじさん 出会い助かりました。その後 姉とも出会い共に被爆した街中を母を探し歩きました。母は 相生橋の付近の病院で 被爆前に 怪我して入院していました。母の 姿は見あたらず探すことは現在も 母もどることもなく 69年も立ちました。被爆で母と叔母、姉を亡くしました。その後には 長女の嫁ぎ先の狭い家で4人兄弟がどうにか生きていきました。どうにか 義務教育をおえて 15歳の時 肝臓、腎臓を患い 希望の職業も付けず 転々と職を変えながら、 定時制を卒業しこの間は働くことの出来る、体調ではなく 時には 鼻血は夜中の手ているときにも出ました。枕元には 髪の毛は抜けていて、朝これを見るときは、ショックで 一日は悠つでした。皆さんに助けられて現在まで生きてきました。

原爆が悪いのではありません。あの戦争がなければこんな苦しい人生を送ることはなかったのです。日本政府は、なぜ戦争をしたのか色々考えました。日本はアメリカにいいじめを受けて、かんにんの尾が切れて、あんな戦争に突入したのでしよう。また 第一次戦争で勝利をした。日本軍人の組織が運命の別れこの戦争をしたのは 日本軍人でした。また若者に 日本のためと義務教育で先生方が生徒に 日本のためと学ばせた教育が 間違いない 報道も問題です。

沖繩が あんなに戦争で痛めつけられたのに（沖繩の山奥には避難していた洞窟があちこちにあります。どんな気持ちで沖繩の人は ここで過ごしたのか恐ろしさが知れました） 日本は降伏しないので このような恐ろしい原爆を使用したのです。

この原爆で 財産も 親や兄弟、親戚を失うこととなりました。

私達の様な 幼い子供は 親の財産も知らない 内に人手に渡ってしまいました。

祖先の大事な 財産は 全てなくなりました。中庭のあり玄関は広い家での思い出、庭で兄弟で ざると棒にひもを結び棒の上に カゴをのせて 罌を作り小鳥を捕まえて楽しく過ごした思い出や 玄関には自転車がありましたそれは現在と違い 広い玄関でした土間の下には 防空壕がある大きな家でした。

このような環境で 被爆後の10年間は、日本政府は、何もしく被爆者を見捨てて 対策もなく広島市の市民は生きてきました。

幼い私達も 親戚のある狭い部屋で 食べるものもなく毎日を耐え過ごし、住居も何度も変わり 貧しいせいかわつて、 栄養のある食事もなく、結核病の病にも おかされました。 悲しい幼年時代を生き伸びてきました。このような経験は 二度とおかさない様に 日本政府にお願いします。

放射能は 目に見えない怖いのです。10年後、20年後に 気付いては人生は終わりです。

東日本大地震の皆さん 早く福島から離れて下さい。この病気は本人だけの病ではありません。

体内の遺伝子まで変えて 子供や孫までも 苦しむことになります。

また汚染された 産業廃棄物を 日本中にばらまかないでください。日本全体が汚染国になり海外から汚染の圃日本となりかねません。 日本の方々、今が大切です皆さんで汚染国にならない様、日本政府に呼びかけましょう。

1ー 私達は、このような、体験を忘れることが出来ません。二度とこのようなことがないよう、平和を守っていかなくてはならないと思います。

2- 戦争は、してはならず、皆んなで力を合わせて原爆禁止、原爆を世界からなくして行かねばなりません。
3- 二度と原子爆弾を使用しない、世界であつてほしい。そして真の平和でありますように祈ると共に、原爆で死亡された方々のご冥福をお祈りいたします。

4- 今、全世界で、核廃絶が叫ばれています。一日も早く、実現する事を願います。

5- 人類の滅亡をもたらず「核兵器」を全世界から早期廃絶を望む。

6- 二度とこんな悲惨なことが起きないよう世界平和を念願しております。

7- 被爆の体験をした人がだんだん少なくなっているのので、原爆の恐ろしさを語り継いで、

どんなに恐ろしいかと言うことを後世の人に伝えて二度とこんなことのないようにしていかなければなりません。

8- こんな恐ろしい戦争は二度とあつてはならないと思います。

原爆禁止を世界に訴え平和でありますことを念願いたします。

被爆者として 次世代に 全世界に この苦しみを 伝えたい。

戦争のない 平和な世界を祈ります。

広島県に平和活動が 市民に伝わりにくい

若者の参加が 少ないもう少し参加が欲しい。

反核平和火リレーなどは 行政の方のみで市民の皆さんは知らないよう。

広島県は 少し平和に対しての関心が乏しい 被爆県広島県の活動が伝わらない。

国際的に 伝えるには 広島空港に 被爆体験コーナーを分かりやすくして欲しい。

今後とも 被爆国日本を 全世界に伝えるよう よろしく お願いいたします。

以上

広島市民国際平和推進部平和推進係り御中

No.1

永^と久に残^りる日

昭和二十年六月に入つて夜間空襲警報で、防空壕へ避難する事が多くなり夜中の役所への駆け込みも多くなりあの六月日曜日は遂にこれでお勤してしまつた。午が八時すぎ頃の襲来で防空壕へ入つたのでお解除となり、ホツと家に落付き、冬^冬衣^{冬衣}束^束をぬぎ、腕を出した途端、八時十五分、太陽が輝き鳴らんと直進かと思ひやどカクと光つて家は崩れ、一時氣絶状態、やつと抜け出たが道もない人の群

叫び嘆き私を悲鳴をあけた左目が開かず、顔はこれドロリとした血、顔は倍にはれ上りガラス片が突つ立りまると夕クツを流う様

榮橋の真中^{真中}の欄干^{欄干}にもたれて書いた^{書いた}遺言^{遺言}の字、書けた命あつたと叫んだら前^前の上^上へ、五本^{五本}抜け^{抜け}ていたのに気付きました。語れば長い詩も「あの日」と題し、毎晩口ずさんでいる私です。戦争は勝つても負けると、良い世にはなりません。私の五十年振りに出たガラス片、^三ミ^ミリで丁が資料館の片隅で

No.2

平和を願つてゐるでしょう。私を今縁あつて岡山での六十一年余が来ました。忘れぬ事は出来ません、今^今左^左赤^赤赤のガラス片が、^遺遺^遺れ、と元氣をくれています。

語つても、報して私の心に残る嘆き、叫びの声は消えませんが、こんな心身共の苦痛は二度あつてはならない私は志を大にして皆さんの前で伝えたい。

岡山市

小野田久子
守六太

「被爆者は訴える」

仙台 木村 緋紗子

私は1945年、広島に投下した原子爆弾で被害を受けた被爆者です。当時、私の家族6人が住んでいたのは、広島市堀川町、爆心地より0.7kmの所でした。忘れることの出来ない、8月6日は幸いにして、母の里の大須賀町爆心地より1.6kmの所で被爆したので、父を除く家族5人の命は助かったという状態でした。

私の親族で原爆を受けた人数は、18名 10日以内に原爆死した者は、8名 その後の死没者は6名、現在4名の被爆者が生き残っています。

私が原爆を受けたのは、8才（国民学校2年生）でした。命を取り留めたものの、私たちは戦後、他人に話すことが出来ない悲惨な人生を強いられました。

私は8月6日の原爆投下の悲惨な有様が理解出来ませんでした。

私の出生地「堀川町」で父は内科開業医として住居していたので、私の出生は幸せなスタートをした訳です。悲惨な原爆投下以来、被爆者として今日まで生きながらいて来た私たち家族は、色々な面で苦難な道を歩んで来ました。

あの当時、8才にて子供らしい生活も出来ず幼児・青春時代を過して来たのです。外見は、元氣そうに見える私ですが、この69年間で8回の手術をうけ身体障害者というハンデいを背負いながら生きながらいております。

広島・長崎で、夢と希望をもって生活していた、市民たちが原爆被害に遭いその実態を知る事が出来ないまま、どんな思いを残して死んでいったのだろうか？

その死者の思いを私たちは、考えてみなくてはならない。

ふたたび我々のような犠牲者を出してはならない。その為にも核兵器の廃絶を一日でも早く実現する必要があります。原爆投下は人類が体験したもつとも残酷な行為であり、決して二度と繰り返しては成らない犯罪です。核兵器は人間として、生きる事も許されない非人道的な兵器。高齢化した被爆者の運動とその成果を未来へ引き継いでいく為には、次の時代を担う若い人たちに被爆の実相を語り残り風化させない様に努めなければなりません。戦争のない二十一世紀を求めて私は生き叫びます。原爆は「受忍できない」「核兵器をなくせ！再び被爆者をつくるな！」と地球上から核兵器が無くなるまで出来る限り頑張りたいと思います。

たった一発の核兵器で多くの犠牲者を出し、あの日から現在に至り犠牲者は放射能の病に犯され明日をも解らない命で日々過しています。生き残り被爆者は出来る限り皆さんに被爆の実相を語り継ぎ、若い世代の方たちに話したいと思います。

再びこの様な過ちが起きないよう、核兵器廃絶と戦争のない、平和な世界を築くように共に考えましょう。「戦争は人間の心で生まれるものである。人間の心で平和を作らなければ成らない」ヒロシマ・ナガサキを知る事は未来を考える事である。